

ちひろとケーテ・コルヴィッツ

—世界中の子どもみんなに平和としあわせを—

ピースあいち研究会 丸 山 豊

2017年夏、ピースあいちで「いわさきちひろ展」が開催される。これに先立ち3月には「原爆の図展」が行われた。丸木夫妻とちひろがピースあいちでつながることになる。これは画期的なことだ。

3月の「原爆の図展」では、丸木位里と俊のヌードデッサン画が話題を呼んだ。そのモデルはいわさきちひろだったからである。周知のとおり、ちひろは俊に師事した。二人の表現方法はまったく正反対だったが、底流ではつながっている。

その源はヒトラーから弾圧されたドイツの女性版画彫刻家、ケーテ・コルヴィッツ(1867～1945.4.22。ヒトラー自殺の8日前77歳で死去)ではないかと勝手に推測する。



種子を粉にひいてはならぬ (1941)

ケーテ・コルヴィッツの《種子を粉にひいてはならぬ》、この石版画(リトグラフ)を初めて見たのは実教出版「高校世界史」教科書(1984年版)の中扉であった。

3人の子どもたちを抱きしめ、毅然と顔を上げて睨みつけている母親に惹きつけられた。「母親が睨む相手は誰なのか」「種子を粉にひくとは」「この母親は誰か」など生徒に問いかけた。

ちひろの『戦火の中の子どもたち』(1973)の《焔のなかの母と子》を見た瞬間《種子を粉にひいてはならぬ》と重なった。

《原爆の図》第三部「水」に描かれている母子像(注1)では、ケーテ・コルヴィッツの《ピエター-死んだ息子を抱く母》が頭に浮かんだ。

戦前、モスクワの美術館でケーテ・コルヴィッツの作品を観て大きな衝撃を受けた俊(注2)は、ちひろにもその時の感動を伝えたに違いない。俊とちひろ、二人の作品には相通じる生き方を見ることができる。

2017年5月9日、安曇野ちひろ美術館を訪れた。「ちひろのアトリエには、いつも『ケーテ・コルヴィッツ作品集』が置かれていた」の一文が目止まった。



ピエター-死んだ息子を抱く母(1938)

しかし、ちひろは生前「私はケーテ・コルヴィッツのように描けない」とつぶやいていたらしい。広島まで行きながら原爆ドームを正視できず資料館訪問予定もキャンセルした。「丸木さんのような絵はかけない」と悩みながら、子どもと母の悲しみを『わたしがちいさかったときに』（1967）に描き出した（竹迫祐子『ちひろを訪ねる旅』）。

どの絵からもちひろの思いが伝わる。

世界中の
こどもみんなに
平和と
しあわせを

命を削ってまで描いたといわれる『戦火の中のこどもたち』に、ちひろとケーテ・コルヴィッツの人生が重なって見える。

（注1）山端庸介の写真を参考にしたことは有名である。

（注2）「私（俊）がはじめて彼女の作品に接したのは、モスクウの西洋美術館の一室であった。私は驚き感動してこの苦しみの民衆を、その悲しみを身をもって把へ、うったへ、表現した彼女に深いあこがれと尊敬を把（ママ）いた。」（赤松俊子のケーテ・コルウイッツ評 丸木美術館提供）

また小沢節子はその著『原爆の図』の中で「ケーテの作品の中には、こうした女性、母親だけが知っている苦痛やうれい、よろこびがぐっと胸を打つ」（『絵は誰でも描ける』）と、俊自身の言葉を引用している。

付記：ちひろが愛した松本の城山（じょうやま）公園を訪れる（2017.5.8）

○以下の写真は、ちひろが幼い頃からよく登った母方の実家近くの城山公園で筆者が撮影したもの

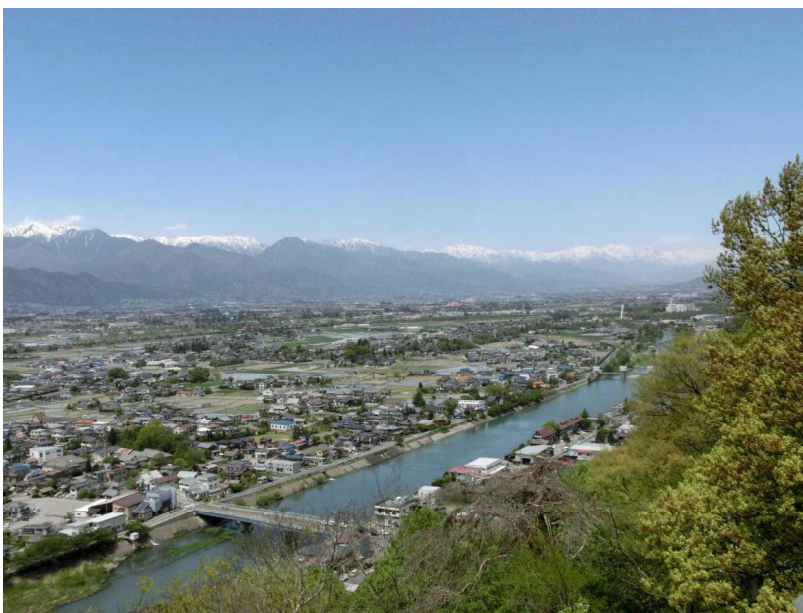


写真1 【ちひろの原風景】

・眼下に流れるのは奈良井川、橋は新橋、橋の手前左下に母方の実家があった。奥に安曇野が広がり、北アルプス後立山連峰が一望できる。

・この原風景が信州人ちひろを生んだ。



写真2【ちひろが眺めていた常念岳】

・城山公園に登るとすぐ目の前に常念がみえる。

・ちひろの日記『草穂』には、城山より常念岳を描いたスケッチがある。
(1945年8月28日)



写真3【城山公園の一角にあるちひろ記念碑】

・ちひろ没後30年にあたる2004年に建立された。

・オブジェはイス、背もたれに《赤い毛糸帽の女の子》『ゆきのひのたんじょうび』がはめ込まれている。



写真4

【ちひろの日記『草穂』
の紹介モニュメント】

・・・戦争が終わった
とき、ちひろは城山に
登りアルプスや美ヶ原
をスケッチし、ノート
に次のような言葉を記
しました。「国破れて山
河あり・・・(略)私の
父を生み母を生みそだ
てた(略)本当の故郷
なのです・・・」

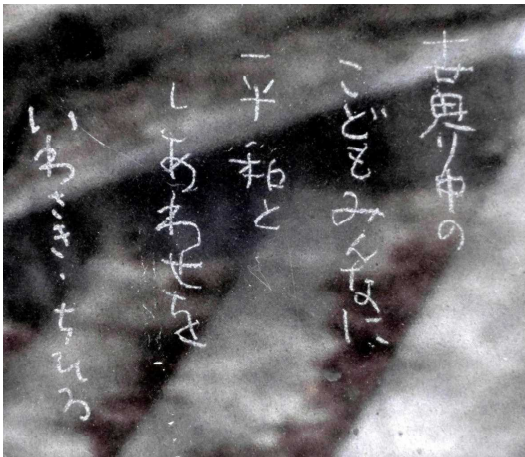


写真5

【下部に刻まれているちひろの願い】

世界中の
こどもみんなに
平和と
しあわせを

いわさき ちひろ

*この言葉は 1970 年ベトナム戦争に対するメッセージであった。しかし、これは若い頃
傾倒した宮沢賢治の「みんなのさいわい(幸い)」を求めた世界観にも通じる。